

心、実りの心へ

町内で農業を営む上中通寿さん(徳山区)が、「ふじのくに未来をひろく農林漁業奨励賞」を受賞しました。

この賞は、地域の農林水産業への貢献が期待される事業者を、県知事が奨励し表彰するものです。

上中さんは、町内の耕作放棄地を借り受けて地域に適した農作物を栽培しており、その取り組みの継続が期待されての受賞となりました。

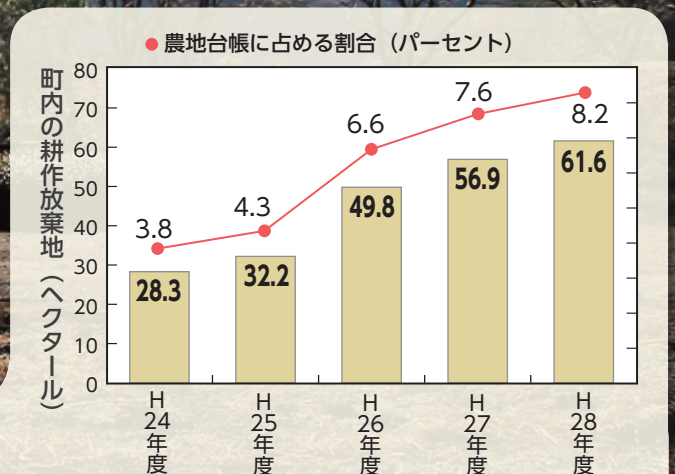
増え続ける町内の耕作放棄地。

自身の農業経営に活用させるため、荒廃農地の再生に奮闘する上中さんの取り組みを紹介します。



▲昨年収穫したソバの実

【問】産業課・農業室(56)2226



増え続ける耕作放棄地

高齢化や農業の担い手不足により、町内の耕作放棄地が増え続けています。

この5年間で、その面積は2倍以上の増加となりました。これは、農地台帳にて公表されている750ヘクタールの農地のうち、1割弱を占めていることになります。

なぜ、耕作放棄地は問題なのか

放置され荒廃した農地は、周辺の農地を荒らす鳥獣のすみかや、病害虫の発生源となることが指摘されています。また、道路沿いに草木が無秩序に生い茂った農地が点在することは、景観上、観光客や来訪者にマイナスイメージを与えることになります。

耕作放棄地を活用する農家を支援

こうした状況を改善するため、国や県、町では、耕作放棄地を活用しようとする農業経営者に対して、その取り組みを応援する補助金を用意しています。

【例】特産物振興事業費補助金(町独自の補助金)

- ◎対象:地域の気候風土を生かした農作物を栽培・出荷しようとする農業経営者や新規就農者。
- ◎補助例:荒廃農地や新規農地の造成費・地盤改良費など。

Interview



かみなか農場
上中 通寿 さん

これまでの取り組みを評価し奨励していただいたことを、とてもうれしく思います。同時に、皆さんの大きな期待を感じ、結果を出していかなければと気持ちが引き締まりました。

現在、徳山区や青部区、接岨区など町内各地で13ヘクタールの農地を耕作しています。そのうち、2.6ヘクタールが、耕作放棄地でした。

農業は、基本的に薄利多売です。収益を上げていくためには、農地を集約し機械化や効率化していくことが求められます。だから、活用できる農地は積極的に借り受けたいと考えています。

それから、栽培した農作物を地元で消費してもらうという思いも、農地を拡大する理由のひとつです。今はまだ少量生産のため価格を下げることでできませんが、今後は生産量を増やすことで、地元の飲食店でも気軽に使える価格で提供できるようにしたいと思っています。

また、野菜がみずみずしく元気に育っている畑は、周囲にも活気を与えるはずです。町を訪れる観光客に美しい景観を楽しんでもらうためにも、耕作放棄地を減らしていきたいですね。

荒廃した農地は地力ちりよく(土に含まれる養分)が低い傾向にあります。ソバのほかにも、春から秋にかけては、トウモロコシ・トウガラシ・キュウリ・イモ類などを栽培しています。川根本町ではこの時期の寒暖差が激しく、味や香りがはっきりとした農作物ができます。また、秋から冬には大根・白菜・ホウレンソウなどを育てています。

この地域の特徴として、頻繁に霜が降りることがありますが、霜をかぶった野菜は甘みが凝縮します。こうした地域特有の気候風土を付加価値として、他地域との差別化を図りながら出荷しています。

耕作放棄地の抜根・除石・整地などの再生工事にあたっては、国や県・町から補助金という形でご支援をいただき、とても感謝しています。今度は上質な農作物を栽培・出荷することで、地域に恩返しができるようになれたらと思っています。

また、国の補助を受けながら、就農希望者の研修を受け入れ、農家として自立するための支援も行っています。この町に農家の仲間が増えることは、町の農業を取り巻く状況を改善する助けになると信じています。

耕作放棄地の増加は、山間地に住む私たちが当たり前としてきた営みが失われつつあることのあらわれだと思えます。自らの農業経営を通して、その状況改善のために少しでも役に立てるよう、これからも頑張っていきます。

収益率上昇・販路拡大・ブランド力強化に向けて

「川根農産物直送便」の取り組み

川根地域の農業経営者で組織する川根清涼野菜出荷協議会では、各農家が収穫した農作物をワゴン車でまとめて輸送・出荷する「川根農産物直送便」を実施しています。

同協議会の設立当時から携わる上中さんは「市場までの輸送体制が、この地域における農業の課題だった。農家の労力を軽減でき、少量の出荷でも収益率を高められる」と話します。

出荷される農作物には独自ブランド「川根やまそだち」のシールが貼り付けられ、JA大井川の直売所「まんさいかん」や道の駅などで販売されています。



「農作物を新鮮な状態で出荷できる」と上中さん。同便を利用した農家は、これまでに30名以上を数える。